

国際化する平和博物館 — その定義と類別化をめぐる —

坪 井 主 税

近年、「平和博物館」が国内外の学会、出版界で取り上げられている。学会では例えば、1993年の欧州平和研究学会(European Peace Research Association)の平和教育部会「平和博物館(Peace Museums)」¹⁾、1995年の日本平和学会春季大会の分科会「自治体における平和記念館と平和教育」で、このテーマが議論されるようになったし、出版界でも、国内では『世界の平和博物館』(西田勝・平和研究室編、1995、日本図書センター)、『平和博物館・戦争資料館ガイドブック』(歴史教育者協議会編、1995、青木書店)、『世界の「戦争と平和」博物館』(荒井信一・早乙女勝元監修、1997、日本図書センター)が発行され、国外では UNESCO(Paris)が *Peace Museums Worldwide* (『世界の平和博物館名鑑』、1993) を発行している。UNESCO の季刊雑誌 *Museum International* (1993年1月号) もロンドンの博物館学会の雑誌 *Museums Journal* (1993年7月号、1997年1月号) も特集を組んでこのテーマに関心を示した。これらの関心の誘因となった「平和博物館国際会議(International Conference of Peace Museums)」は、1992年英国ブラッドフォード大学平和学部で第1回、1995年オーストリア平和・紛争解決研究所兼ヨーロッパ平和大学で第2回がそれぞれ開催されている¹⁾。「平和博物館」間の連絡網も、国内では1994年「平和博物館会議」²⁾ が、国際的には「第2回平和博物館国際会議」の成果として「国際ネットワーク事務局(International Board)」³⁾ が構成され、ネットワーク誌 *International Network of Peace Museums* が発行されることになった。そのネットワーク誌によれば、現在南アフリカをはじめ、いわゆる「紛争地」の中東、キプロス、韓国にも(後に述べる欧米タイプの)「平和博物館」を作ろうというプロジェクトや「国際ネットワーク」をニューヨーク国連広報局との関わりを持つものに発展させる試みが進行している⁴⁾。「平和博物館」は、国際化の様相を呈してきた。

経済のみならず、何事も国際化すれば、同一用語に対する定義は一定させなければならない。「平和博物館」もまた、この問題に直面している。「平和博物館」とは何か。問題を提起したのは、国立オシヴィエンチム博物館(通称「アウシュヴィッツ国立博物館」、以下「アウシュヴィッツ」)や欧州各国のレジスタンス博物館を、逡巡の後、保留し、なぜか、大英帝国戦争博物館を「平和博物館」としてリストに入れた *Peace Museums Worldwide* の編集責任者 Ursula

マリア ルーザー
 -Maria Ruser である。ルーザーは、ジュネーブ国連の国際連盟公文書図書館の筆頭司書で通称「国際連盟博物館」の責任者、歴史学博士でもある。国際連盟時代の不戦条約の成立に尽力したケロッグやブリアン、当時の反戦活動家で小説家・ノーベル平和賞を授与されたベルタ・フォン・ズツナーをはじめとした女性たちの業績や人生、考え方をいかにも堅牢で立派な国連の建物内に展示して、欧米平和博物館の一角を占めている人物である。彼女は、*Peace Museums Worldwide* の不首尾は「平和博物館」の定義が一定していないことにある、と指摘したのである⁵⁾。ルーザーの指摘は、日本の「平和博物館」にも共有されてよいものである。例えば、「韓国人に対する侵略への民族的抵抗、独立のためのたたかい、民族一体感の追求、発展と進歩の記録に関する芸術品や資料を集め、民族意識をめぐませ、愛国心を高めること」(『世界の平和博物館』p.188) という目的で建てられた韓国の独立記念館をどう扱うのか、戸惑うことであろう。現在、「平和博物館会議」にも「国際ネットワーク事務局」にも「平和博物館」の定義や規定がない。誰でもが自由に「平和博物館」を自称でき、誰でもが勝手に「戦争博物館」さえ「平和博物館」であると他選できる。国際化しつつある「平和博物館」の定義をどうするか。それに伴う類別化をどうするか。欧米の、そして、日本の「平和博物館」のいくつかを取り出して、定義を規定する展開を見、究極目的を抉り出すことによって、それらを求めてみよう。

1

ウルズラ＝マリア・ルーザーが属する欧米の平和博物館の主たる展示は「平和」である。ノーベル平和賞受賞者南アフリカのデズモンド・ツツに支援され、ブラッドフォード市から建設予定地を与えられ、欧州地域開発基金から36,500ポンドも補助されて、今半分ほどオープンしている(英)ブラッドフォード平和博物館(館主:公益団体 Give Peace A Chance Trust)の展示リスト(*Open the doors to The Peace Museum*, 日付なし)を見ると、それがよくわかる。

- (イ) 平和創造者(peacemakers)の活動・思想・生き方
- (ロ) 非暴力手段で行われた平和・正義・環境保護の運動
- (ハ) 平和的な生活の実例
- (ニ) 人権や国際法
- (ホ) 異民族間、異宗教間、少数民族出身者との和解の努力と実例
- (ヘ) 平和をもたらす芸術、交流、医学、スポーツ、交易の実践と実例

このリストの上段にある次の文言は、一層ここが平和展示の場であることをわからせてくれる—「人間の平和的手段による平和の闘いは、ドラマとヒロイズムに満ちた歴史である。」1996年7月オランダ・ハーグの国際司法裁判所で「核兵器の違法性に関する法廷」を開かせた360万署名は、ここにある⁶⁾。

他の平和博物館はどうか。1980年世界で最初に平和博物館を名乗った(独)リンダウ平和博

博物館は、宗教、人権、人道主義そして平和の分野で献身した約100人の平和の思想を短い伝記にして置いてある。ガンジーはもちろん、英国で奴隷売買禁止法を作ったウィルバーフォース、シュバイツァー、マリア・テレサ、設立者が敬虔なカトリック教徒のせい、歴代ローマ法王などがある。ここにある戦争展示は、ドレスデン空襲だけである。設立者トマス・ヴェッチは、ブラッドフォード平和博物館と同じことを言う—「世界の歴史は戦争の歴史ばかりではない、平和のための努力をした人々の歴史でもある」、そして、「わが館の目的は、平和や正義、和解がどれほど人々の生活に影響し、心を突くものであるかを来館者に認識してもらうことである⁷⁾。」

「戦争を賛美する博物館が戦争博物館なら、平和をたたえる平和博物館があつていいはずだ⁸⁾」と、1981年、(米)シカゴ平和博物館は開設され、約10年後、欧米平和博物館の典型となった。共同設立者の一人が画家ということもあつて⁹⁾、広島・長崎の被爆者がその体験を描いた「劫火を見た」を米国で初めて展示、大きな反響を呼んだ¹⁰⁾。ジョン・バエズ、ジョン・レノンなどポピュラー、フォーク歌手の反戦歌をヘッドホーンで聞かせ、直筆の楽譜を見せる「平和にチャンスを与えよ(Give Peace A Chance)」展は、その後、欧米平和博物館運動の先駆けとなる(英)公益団体 Give Peace A Chance Trust の名称となった。ジョン・レノンは、この展示が縁で自分のギターを博物館に寄贈したのである。非暴力手段による反戦運動や社会変革運動を象徴する旗、バッヂ、キルトなどが無数に展示されている。なかんづく、600枚のヴェトナム反戦画は圧巻である。来館する子供達には遊びを通して、非暴力手段による紛争解決の方法を学習させている。この館には、様々な外国の見学者が訪れたが、その中に、やがて2年後、日本で「平和博物館を創る会」を結成するメンバーもいた¹¹⁾。

最後に、ユニークな(独)レマーゲン平和博物館を見てみよう。この例は、沖縄県立平和祈念資料館わきの「平和の礎^{いしじ}」を彷彿とさせる。ここは、第1回平和博物館国際会議に誘われるまでは、レマーゲン橋記念館という名称だった。レマーゲン橋といえは、1945年3月7日の米軍と独軍の激戦の地。当時米兵だった者にとっては「勝利の地」とすると同時に、そこで失った1,700の戦死者の慰霊の地でもある。独兵にしてみれば、捕虜となって飢え、寒さと湿気に苦しめられた恐怖と戦慄の象徴である。設立者ハンス・ピーター・クリューテンは、この鉄橋を保存することで惨禍を繰り返さずまいと願い、記念館を作った。当時の鉄橋の写真、記録、新聞記事を置いた。元米軍兵士はよく来た。どうしたわけか、元独兵捕虜が来ない。そのうち、ドイツ人側から、親米記念館だという批判が出て来た。クリューテンは、米人にもドイツ人にも平和の記念館と思われるにはどうしたらよいかと考え、米・独戦死者双方の霊を弔う慰霊塔(Chapel of Black Madonna)を建てた。それから、米退役軍人も元独軍捕虜も来館し、集会を持つようになった。そこへ、国際会議の呼びかけがあった。他の平和博物館に学んで、クリューテンはノーベル平和賞受賞者リーフレットを置いたり、ベルタ・フォン・ズツナーとその他の女性反戦活動家のパネル展をしたりしている。将来の計画として、敷地内に大きなアメリカ

・ドイツ平和公園を作りたいと言っている。1945年3月には米・独の闘いの橋であったものを、米・独の和解の架け橋にしようとしているのである¹²⁾。

欧米平和博物館の究極目的を簡明に理論づけたのは、ブラッドフォード大学平和学部で平和主義・平和思想史を研究するピーター・バン・デン・ダンガン博士である¹³⁾。「平和博物館は、武器による平和(armed peace)や所有武器の均衡による平和(peace through deterrence)にとって代わる平和へのアプローチ、すなわち、調停・和解・国際法に関わる個人・団体、発想、そして実践例を展示すべきである¹⁴⁾。」非暴力手段による平和(あるいは、平和的解決による平和と言ってよい)の選択ということである。欧米社会では、どちらをとるかという議論はふつうで、一般に各国政府は前者の「平和」をとる。国民の多くも、ヒトラーの引き起こした武力による世界侵略を武力をもって抗し、辛酸をなめつつ勝利した経験があるからか、この「平和」をとる。だが、この方法で勝ち取った「平和」は、敗れた側に怨念や復讐心を残し、それがもとで再び戦いとなる場合が多い。この「平和」をとる者はよく、非暴力手段で平和を勝ち取ろうとする者を、弱虫、臆病者と言う。だが、そうだろうか。非暴力手段による平和には、勝者もなければ敗者もない。戦場での殺人という、良心に恥じる行為もない。平和の永続性も期待できる。欧米平和博物館の究極目的は、平和的解決による平和の達成である。

2

欧米平和博物館の「アウシュヴィッツ」に対する逡巡は、全くの誤りである。彼らは、自分たちの「平和を展示するのが平和博物館である」という意識にのめり込み過ぎて、他にも実は「平和博物館」と名乗り、あるいは、そう思われている博物館があることを知らなかったのである。そして、「われわれのめざす平和博物館は、戦争の恐怖を展示するものでもなく、単なる反戦博物館でもなく、それらを越えるもの」・「戦争の恐怖を展示する博物館は、平和をもたらさなかった」とさえ思ってしまったのである¹⁵⁾。平和博物館の類別化がなされていないことを考えれば、彼らの誤りは許されるかも知れない。

「アウシュヴィッツ」は、自らを平和博物館と思っているかどうかは別として、究極目的は欧米平和博物館のそれと全く同じである。「アウシュヴィッツ」の館長を25年務めたイエジ・ヴルレフスキは、1991年9月大阪国際平和センター主催の「世界平和ミュージアム交流会議」で淡々と、しかし、見事にこう言っている—「おそらく博物館を訪れる動機は、人格が皆違うように千差万別でしょう…そこで私たちは人々のこの関心を発展させるために、つまり来訪者が自覚的な平和の擁護者になるように、またここで見た戦争の残虐性の痕跡が彼らに攻撃性や報復心を起こさず、どんなに困難なことでも平和的解決を図ることのみが正しい行為であると自覚させるようにするには、何をすべきか、どうすべきかとの問いを自らに課してみるのです」。そして館長は、究極目的が具現化した姿を十数人ないし数十人のドイツの青年グループの例をとって、こう続けている—「このグループは罪をつぐない、そして平和のために貢献す

ることに全力を傾けているのです…自分と歴史的事実との関係を表示したい，“アウシュヴィッツへの気持ちを表現したい”とと思っている人々です。彼らは博物館に数日間通い、そこで本や歴史資料から学び、また清掃などの肉体労働をしています。また、博物館の学術研究員や旧囚人たちとも会います。彼らはすべてのことを現場で学び、真実を知ろうとするのです…彼らがアウシュヴィッツに滞在し、彼らを苦悩させるさまざまな問題への答を見つけた結果、以前よりもっとより良い世界市民になるのではないのでしょうか。また、彼らにとって「平和」とは、さまざまな機会に繰り返しいわれる空虚な言葉ではなく、内容と求める意味を有し、若い世代の目的となるものを多くもった言葉となるのではないか…¹⁶⁾」。これこそ、欧米平和博物館が来館者に期待する姿ではないのか。

大英帝国戦争博物館を平和博物館リストに入れたのも、平和博物館の類別化がなされていないことからくる誤りであったかも知れない。第1回の国際会議の際、帝国戦争博物館の展示担当者の一人がオブザーバーとして参加し、同館でもCO^{シーオー}（良心的参戦拒否者）の展示をしたと発言した¹⁷⁾。COは、非暴力手段の一つ。これがきっかけで、平和博物館の一つになってしまったのである。確かに同館には、「1940年の独ブリッツ戦闘機によるロンドン空襲の体験コーナー(The Blitz Experience)」もある。しかし、前述したように、基本的には戦争賛美、英国兵士万歳の博物館である¹⁸⁾。こうした部分的に平和を展示している戦争博物館を、どう類別化するか。同館の設置者すなわち英国政府に、同館の究極目的を尋ねるしかあるまい。

3

最後に、日本の平和博物館を見てみよう。1983年に「平和博物館を創る会」が初めて「平和博物館」という言葉を使って以来、われわれは、1983年前に設立された通称「原爆資料館」と呼ばれる広島平和記念資料館や長崎国際文化センター（共に1955年設立）、画家丸木位里・俊の作品「原爆の図」などを収蔵する原爆の図丸木美術館（1967年）、沖縄戦を主題にした沖縄県立平和祈念資料館（1975年）、1954年のビキニ環礁での米国の水爆実験に遭遇したマグロ漁船第五福竜丸を保存してある東京都立第五福竜丸展示館（1976年）も、1983年後に設立された沖縄のひめゆり平和祈念資料館（1989年）、高知の平和資料館・草の家（1989年）、川崎市平和館（1991年）、いわゆる「15年戦争」を主題とした大阪国際平和センター（1991年）、立命館大学・国際平和ミュージアム（1992年）、埼玉県平和資料館（1993年）などを平和博物館と呼んでいる。これらは、名称こそ違え、主に、自らの地が経験した被爆や空襲あるいは戦闘行為、そしてそこから生じた悲惨な体験の記録や写真、あるいは、戦時の生活や戦争史実に関する資料を展示する博物館である。「平和」の部分もあるが、それらは、主ではない。あくまでも、「戦争」が主である。「戦争」を展示しているのに、なぜ「平和」博物館なのか。この素朴な問に、最も大きい博物館の一つ、大阪国際平和センターの「設置理念」が、他を代表するように、答える—「人類共通の願いである恒久平和は、戦争の惨禍を知る世界中のあらゆる地域の人々が、

それぞれの体験を伝え合い、語り続けることによって達成されます…¹⁹⁾」。いかにも漠然としていて、欧米人、特に欧州人には容易に理解されまい。欧州人には、1902年スイスのルザン市に建てられた国際戦争と平和博物館(独 Die Einweihung des Kriegs- und Friedensmuseums in Luzern; 英 The International Museum of War and Peace at Lucerne)を見て、戦争展示ばかりで平和がないと批判したら、同館長から「戦争が一番平和を感じさせるのです」と、同じように、言い返された苦い経験があるからである²⁰⁾。一体、日本の平和博物館は、「戦争」を展示して、どのように平和を勝ち取るというのか。

日本の平和博物館の平和の勝ち取り方—欧米のように実践的ではなく、精神的な勝ち取り方—を、立命館大学・国際平和ミュージアムの山辺昌彦がやや難しい言葉で語っている—「平和博物館において、戦争の悲惨さ、日本の戦争の問題点、平和の尊さ、平和維持のうえでの民主主義の大切さなどを積極的に問題提起すべきである。この点において価値中立的であってはならない。戦争の反省のうえにたった平和と民主主義の重要性を強調することは当然である。この平和と民主主義は、日本国憲法の立場であり、国や自治体などの公的な博物館は、その尊重の義務がある²¹⁾」。では、「日本国憲法の立場」とは何か。東京都中野区平和資料館建設構想懇話会の報告(西田勝・平和研究室「非核ネットワーク通信」第32号、1996年6月15日)が、ようやく明解に答えてくれた—「憲法擁護を掲げる中野区としては、平和的手段による平和の達成を求め…」。これが、日本の平和博物館の平和の勝ち取り方であり、究極目的なのである。

日本の平和博物館は、平和と言え、その達成手段は「平和的解決による」に決まっていると思っているかも知れない。しかし、千差万別の来館者にとっては、そうだろうか。日本国憲法の立場、すなわち前文と第九条に裏打ちされた日本の非武装、戦争への不参加、非暴力手段による解決などは、現実的には、もうとっくに歴史の脚注になってしまっている。自衛隊という軍隊は存在し、米軍の手足となって働いている。沖縄をはじめ日本中に米軍・自衛隊の基地がある。「恒久平和」・「平和の大切さ」・「平和の貴さ」と言うだけでは、来館者の耳には、「アウシュヴィッツ」が言うように、空虚に響くだけではなかろうか。「アウシュヴィッツ」のように、はっきりと「平和的解決による平和」と言うべきである。

…漠然とした「平和」に「平和的解決による」という限定句を付けることによって、先のレジスタンス博物館の問題は解決できそうである。レジスタンス博物館が、かつての苦しい辛い、そして武器をとって抵抗せざるを得なかった時代の歴史を正確に展示し、そこから、非暴力手段による平和を求めよと来館者に言うなら、それは、平和博物館の仲間である。韓国の独立記念館も同じである。設置者が、現在の設置目的に「非暴力手段による平和達成のための」と加えれば、これも仲間である。その時は、日本人来館者は、かつて彼らを苦しめた責任と償いを忘れることなく、彼らの勇気と先見性をたたえなければならない。

4

われわれはどうやら、「平和的解決による平和」という、定義に織り込まなければならない文言にたどりついた。最後に、これまでなされてきたいくつかの定義を摘記し、短いコメントを加えながら、筆者の定義をまとめてみよう。

(イ) 平和博物館を創る会の定義(1983年)²²⁾ : 「いわゆる平和と戦争に関する諸資料・諸情報を集積し、それらの展示・一般利用を図るための施設」。日本の平和博物館用の定義であろう。欧米平和博物館は「戦争」にこだわるだろう。「平和」に限定句を付けたい。

(ロ) オーストリア・ヴォルゼッグ平和博物館々長フランツ・ドゥイッチの定義(1995年)²³⁾ : 「平和博物館とは、大小に拘わりなく、地域で、平和の進展に関心があり、平和のために個人的な貢献を進んでしようとする人々のコミュニケーション・センターである。」一人で平和博物館を作り上げた人らしい定義であるが、「個人」に限定するのは妥当であろうか。

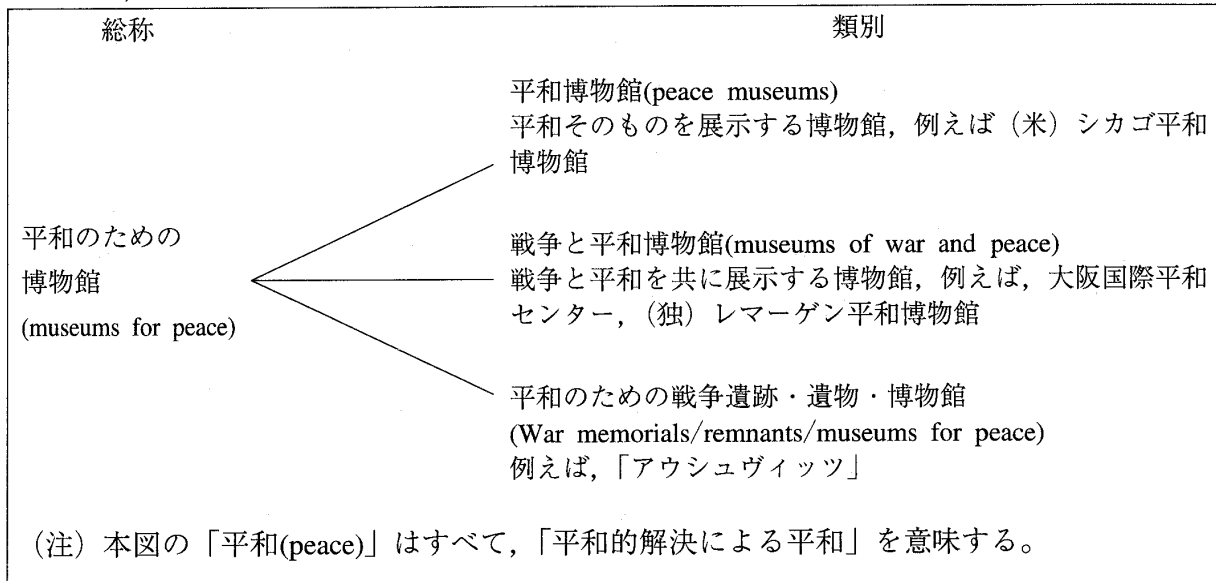
(ハ) 立命館大学・国際平和ミュージアム館長安齋育郎の定義(1995年)²⁴⁾ : 「(展示品を通して)「平和的価値を広めることを目的とし、そのような社会的機能を果たしている(施設)」(要旨、括弧は筆者)」この定義には付加的説明が要る。「平和的価値」とは何かに関する説明である。氏はそれを、「単に「不戦」「非暴力」「軍縮」「和解」「紛争解決」「非核」といった価値に限局せず、平和研究者の間で合意が広がりつつある「広義の平和的価値」を念頭に置いて広く受け入れる」と言及し、なお、「広義の平和的価値」については、例えば飢餓、貧困、差別、社会的不公正、教育や衛生の遅れといった人間の潜在的可能性の開花を妨げている社会的要因(「構造的暴力」)のない状態としている。

安齋の定義はすぐれて学問的である。平和博物館を運動とみる者にとっては、やや難解であり、「価値」という言葉の解釈で「紛争」が起こる可能性もある。

(ニ) 欧州平和研究学会平和教育部会の試的定義(1993年)²⁵⁾ : 「平和博物館とは、平和に関する歴史的展望を与え、かつ、平和教育に資する目的を持って一般公開する系統立った展示物を有する施設」。平和教育の専門家の間では、「平和」と言えば「平和的解決による平和」であることは自明なのだろう。しかし、筆者はあえて定義に入れたい。

(ホ) そして筆者の定義(1998年) : 「平和のための博物館とは、多様な系統立った展示物を一般公開して、平和的解決による平和の達成を啓蒙する施設である」。「平和のための(for peace)」にした理由は、「平和博物館(peace museums)」は、やはり、「平和そのものを展示する博物館」でなければおかしいと思うからである。日本の多くの博物館は、同じ「平和的解決による平和の達成」という目的を共有する博物館「平和のための博物館(museums for peace)」の一つ、「戦争と平和博物館(museums of war and peace)」とするのが、国際社会においては妥当である。「アウシュヴィッツ」は、「平和のための戦争遺物(war remnants

for peace)のカテゴリーである。この線に沿って、これまでの「平和博物館」を類別化すれば、次の図のようになる。



注

- 1) 第 1 回の報告書 *Bringing People To Peace*(Give Peace A Chance Trust, 1993, Hertford UK); International Network of Peace Museums Newsletters nos. 1—5(同前); 坪井主税「Peace Museums in Japan: Numbers, Visitors & Types」(札幌学院大学人文学紀要, 第 52 刷, 1992 年 12 月)参照。第 2 回については, 上記 Newsletter, December 1995; 坪井主税「第 2 回平和博物館国際会議報告」(『地球の一点から』, 西田勝・平和研究室, 第 83, 84, 85, 86 号; 坪井主税「On the War Dead's Memorial Peace Prayer Hall(Senbotsusha Tsuito Heiwa Kinen Kan)」(札幌学院大学人文学会紀要, 第 58 刷, 1995 年 12 月)参照。
- 2) 構成は沖縄県立平和祈念資料館, 長崎国際文化センター, 広島平和記念資料館, 大阪国際平和センター, 川崎市平和館, 埼玉県平和資料館, 立命館大学・国際平和ミュージアムの 7 館, 共同事業・情報交換などの仕事をする(立命館大学・国際平和ミュージアムだより, VOL.2-1, 1995 から)。
- 3) 事務局長にブラッドフォード大学の Dr Peter van den Dungen, 日本担当委員に立命館大学・国際平和ミュージアム館長安斎育郎, ヨーロッパ担当委員に(仏)ヴェルダン平和・自由・人権センター館長 Denis Marechal とスイス・国連の国際連盟公文書図書館の Ursula-Maria Ruser, アメリカ担当委員にコルゲート大学平和学部の Dr Nigel Young と剣を鍛へ平和センターの Ruth Usher が任命された(International Network of Peace Museums Newsletter, no 5, Dec. 1995 参照)。
- 4) 上記 Newsletter no 8, Oct. 1997。
- 5) 同書まえがき参照。
- 6) PEACECENTRE(Give Peace A Chance の機関誌), Annual Report 1996。
- 7) 第 1 回平和博物館国際会議でのプレゼンテーション・ペーパー(typed, 日付なし)。
- 8) Marianne Philbin & Peter Ratajczak, 同会議ペーパー(typed, 日付なし)。
- 9) 一人は米のユニセフ代表だった Marjorie Benton, 画家は Mark Rogovin でシカゴの住人。
- 10) The Christian Science Monitor の TV 番組(1981 年)でも紹介された。
- 11) 第 1 回平和博物館国際会議への Tsutomu Iwakura の paper(typed): Profile of the Japan Peace Museum. 本人は都合で不参加。
- 12) 同プレゼンテーション・ペーパー(typed, 日付なし)。
- 13) 例えば, *Pacifism: Sources of Inspiration and Motivation in West European Pacifism And The Strategy For Peace*, Macmillan, 1985, pp.18-32 をみよ。

- 14) van den Dungen, Peter. Proposal: A Peace Museum In Britain in *Medicine And War*, Vol.7 No.4, Oct.–Dec. 1991, p.283, Frank Cass, London)
- 15) 第1回平和博物館国際会議における Dr Nigel Young のまとめの報告: The role of a peace museum in peace education—thoughts from teaching a study abroad program in Europe—Spring 1992(Set. 1992)から。
- 16) 『世界平和ミュージアム交流会議報告書』(大阪国際平和センター, 1991年12月)pp.21–22.
- 17) 前掲 *Bringing Peace To People*, 大英帝国戦争博物館から個人の資格でオブザーバー参加した Suzanne Bardgett の発言。
- 18) 例えば, *The new Imperial War Museum*(1990)という同館ガイドブックをみれば, よくわかるであろう。
- 19) 「ピースおおさか(綴じ込みファイル)」(財団法人大阪国際平和センター, 1990年9月17日)。
- 20) van den Dungen, Peter. The International Museum of War and Peace at Lucerne in *Revue Suisse d' Histoire* Vol.31, 1981, Schwabe & CO AG. Verlag. Basel, pp.185–202 参照。
- 21) 山辺昌彦「日本の平和博物館の到達点と果たすべき課題」『平和博物館・戦争資料館ガイドブック』所収, p.198。
- 22) 『平和博物館を考える』(平和博物館を創る会・編, 平和アトリエ, 1994)p.67.
- 23) 第2回平和博物館国際会議のプレゼンテーション・ペーパー(typed): Ein Friedens museum: A Peace Museum; ERSTES ÖSTERR, Friedens museum, A-4902, Wolfsegg, A.H.Ö.
- 24) 同会議の英文プレゼンテーション・ペーパー(typed), 引用文はその後に出た「(参考資料)平和博物館の定義を巡って」から。
- 25) Bjerstedt, Ake. *Education and Debate*, NO.102, p.51. School of Education, Box 23501, S-20045 Malmö, Sweden.

(つばい ちから 本学人文学部教授 平和論専攻)